

大みそかから青森市に降り続いた雪は1月下旬に急増し、月末には大人の背丈に達した。2月1日の最深積雪は183センチを記録、観測史上4位となった。2月の積雪が180センチを超えたのは1986年以来、40年ぶりだという。

日に日に高くなる雪の壁に、恐ろしさすら感じる。豪雪はそれだけでなく暮らしの脅威だ。加えて最近、当地で頻発している震度1〜3クラスの地震が恐怖心を増幅させる。昨年12月8日に発生した青森県東方沖地震の余震とみられる。頭上の屋根に積もりに積もった雪が、地震動と相まって家を押しつぶすのでは…。揺れをかすかにも感じるたび、息を凝らす。青森には「豪雪×大地震」が大きな被害をもたらした前例がある。1766（明和3）年1月28日（現在の暦で3月8日）に発生した「明和津軽地震」は、全半壊家屋が約6000軒、焼失家屋250軒余り、圧死者900人余り、

座標



焼死者約3000人に達した（青森市民図書館歴史資料室メールマガジン「あおもり歴史トリビア」）。まれに見る豪雪が年末から屋根に降り積もり、倒壊率を高めたという。人々が危険を冒してでも屋根の雪下ろしに励むようになったきっかけともされる。

冬季に起きた地震といえば、私の世代には1994（平成6）年12月28日の「三陸はるか沖地震」も記憶に新しい。被害が甚大だった青森県八戸市など南部地方は積雪が少なかつたものの、寒冷な環境が避難生活や復旧にさまざまな影響を及ぼしていたことを、八戸

複合災害への備え厚く

工業大の月館敏栄教授が99年、学術誌で報告した。

死者・行方不明者3064人を数え、岩手県や宮城県に大津波が押し寄せた「昭和三陸地震」も、33（昭和8）年3月3日未明に発生した。被災から数日後に岩手県釜石市が猛吹雪に見舞われたとの記録が同県宮古市の資料に残る。そして2011年3月11日の東日本大震災。当ても雪が降って寒かった。勤務していた津軽の中心都市・弘前は全域が停電し、真っ暗な空から降りしきる雪を途方に暮れて見上げていた時の心細さは、「その日」が来るたびに思い出す。東北の自然災害で、潜在的に最大の脅威の一つは、日本海溝・千島海溝を震源とする海溝型地震だろう。国がまとめた全国の想定によると、人的被害が最も大きくなる「冬の深夜」の場合、主に津波によって、日本海溝地震では最大約20万人、千島海溝地震では約10万人が犠牲になると予測される。

青森大社会学部教授

櫛引 素夫

（青森市）

加えて、前者で約4万2000人、後者では約2万2000人が、低温症で命を落とすリスクに直面する。気のめいる予測だ。とはいえ、うなだれているわけにはいかない。「冬の巨大地震」という複合災害を念頭に、少しずつでも備えを厚くしていくしかない。

突然の衆議院解散、総選挙となった。雪に埋もれた各地からは、憤りと諦めの声が聞かれた。誕生した新政権が、どこまで積雪寒冷地を視野に入れ、どのような日本のかじ取りをしていくのか。防災の観点からも注視していきたい。

大雪と巨大地震